

## 近代日本公共図書館利用史の研究：自立のための勉強空間の成立

伊東, 達也

<https://doi.org/10.15017/1654621>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（教育学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 伊東達也

論 文 名 : 近代日本公共図書館利用史の研究—自立のための勉強空間の成立—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、公共空間としての図書館が果たしてきた社会的機能について検討することにより、近代公共図書館制度が日本社会の中に位置づけられていく過程を明らかにするとともに、公共図書館をめぐる合意がいかんして民意の中に醸成されたかを解明することを目的としている。この課題に迫る手がかりとして、近代日本の図書館が、本来近代公共図書館として想定されているものとは異なる社会的機能を果たしていたのではないかと考え、典型的な事例として、公共図書館の利用者の多くが「学生」であったという現象に注目した。

従来の図書館史研究は、個々の図書館の成立史のほかには、明治30年代の制度確立期以降の図書館政策に着目したものがほとんどであり、通史を試みた代表的な研究でも利用者や利用状況については積極的に言及されてこなかった。図書館利用者公衆の形成過程に注目した研究においても、明治期の図書館利用者公衆は中産知識人層とその子弟であったという社会階層としての限定性の理解にとどまり、学生を含むこの時期の図書館利用者にとって図書館との出会いは近代的な読書習慣の訓練を意味していたとの分析に終わっている。しかし、動機も目的もさまざまな公衆が図書館を利用することで読書習慣の訓練をうけ最終的に近代読者層が形成されるという図書館を社会的な読書装置のひとつと見る枠組みは、この後の日本における近代読書の成立と近代公共図書館思想の存在を前提とした見かたであり、実態を明らかにしているとは言い難い。

公共図書館の利用者の大部分を「学生」が占める傾向は既に明治20年代にはみられるもので、明治期のみならず戦前戦後を通じて、図書館の規模の大小や地域を問わずにあらわれた現象である。これは図書館の設立目的や政策とは関わりのないところで形成された特徴のひとつといえるが、近代日本の図書館は、情報機関としての機能より勉強ができる空間としての機能によって社会的に受け容れられたといえ、このことが公共図書館制度に対する原初的な民意のあらわれと考えられる。

本論文では図書館を社会的な読書装置としてではなく、ある時期に都市に出現した公共空間のひとつととらえ、日本社会の中で図書館が学生の学びの場であり続けていることの、近代公共図書館思想の受容と展開の過程における歴史的な意味を追求した。第1章は、図書館についての合意が民意の中に醸成される過程を解明するために、近代図書館に展開する読書施設の伝統が近世にも底流として存在していたと考え、文政期から明治期にかけての福岡藩（筑前国）の庶民文庫の事例について検討した。その過程で、近世の文庫を利用した庶民の読書行動の特徴と近代公共図書館につながる社会的機能を明らかにし、近世の文庫観と近代の図書館観の連続性について指摘した。

第2章は、図書館利用についての設置者側の考えかたの原点を確認し、その後世への影響について明らかにするために、“free public library”としての東京書籍館の成立に影響を与えた文部大輔田中不二麿の図書館観の形成過程をふり返るとともに、学制施行期における田中文政の成立が公共図書館制度の創始に不可欠であったことを確認した。田中の、図書館を学校教育を補完するもの

と考えるアメリカ的な図書館理解がその後の図書館政策にどのような影響を与えたのかを明らかにし、加えてモデルとなったアメリカの“free public library”や“public school library”の実践と近代日本の図書館政策の相違を示して、欧米の近代公共図書館思想の日本での変化を論じた。

第3章は、明治20年代以降の上京遊学者の増加により、彼らによって図書館が利用され始めた経緯について明らかにした。当時の上京遊学者の生活環境や読書習慣の音読から黙読への変化、図書館と同時に存在してきた読書施設である貸本屋の利用状況とも合わせて考察し、特にこの時期に始まった職業資格試験によって学習需要が高まったことに注目して、試験制度の変遷と、図書館が職業資格取得のための学びの場として発見され利用が定着していったことを示した。そして明治30年代後半以降、高等教育機関進学のための入学試験競争が激しくなり、「受験」という語が一般的に使われるようになった時期の図書館の利用状況に注目して、新聞・雑誌記事の論調の変化から図書館が受験生のための共同勉強室や受験道場のように認識されるようになる過程を明らかにした。

第4章では、おもに明治40年代以降、「苦学」が高等教育を求めるものから普通教育を求めるものに変化したことや、中学講義録等によって資格取得のために個人で勉強する「独学」が行われるようになったことに伴い図書館が苦学者や独学者のための学びの場として特に意識されるようになったことについて、苦学生に広く読まれた雑誌『成功』の図書館論の分析によって明らかにした。

さらに、ここまでの論考を補うため、勉強のための空間として使われるようになった図書館の閲覧スペースが日本の図書館において欠かせない施設とみなされるようになった経緯について、図書館建築の変化に注目することで解明を試みた補論を付加した。